

# S. キエルケゴールの墮罪理解(1)

——キエルケゴールの女性理解からのアプローチ——

舟木讓

## I

20世紀後半より高まったフェミニズム運動の渦中で、キリスト教もまたそれ自身の再検証を余儀なくされた。さらに今日では、人間に於ける、従来の性のあり方ならびに性差の理解についても再検討が迫られ、性をめぐっての問題は、多様化し多くの問題提議がなされ続けている<sup>1)</sup>。その中で、キリスト教思想が大きな影響力を有する西欧社会を中心に、性別、性役割、そして性差別の一つの根拠とされてきた、『旧約聖書』の「墮罪物語」をめぐる批判と再解釈によって、多くの果実が産み出されてきている。特に、従来の原罪理解、墮罪理解からくる女性蔑視、女性軽視の風潮を聖書の再解釈によって克服しようとする試みが今日特に、顕著となっている<sup>2)</sup>。

こうした動きの中で、人間の現状を罪の中にある状態と規定し、その根源を蛇の

1) フェミニズム、ならびにキリスト教会におけるフェミニズム神学に関する文献は、今日枚挙に暇がないが、本稿の性格上、特に、参考とした文献を以下に記すこととする。また、その文献に於ける、フェミニズム理解の妥当性については、ここでは、論究しない。

江原由美子・金子淑子編『フェミニズム』新曜社 1997年

ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社 1886年

井上洋子・古賀邦子他著『ジェンダーの世界史』法律文化社 1998年

アンドレ・ミシェル著、村上真子訳『フェミニズムの世界史』白水社 1993年

2) 下記の文献において、前世紀のフェミニズムへの批判と共に、今日のフェミニズム神学が向かうべき地平が、詳細に論じられている。

L.Schottroff/S.Schroer/M.Th.Wacker; Feministische Exegese. Forschungserträge zur Bibel aus der Perspektive von Framen, Darmstadt 1995

## エクス 言語文化論集 創刊号

誘惑に負けた女性に帰そうとする従来のキリスト教理解を再検証する試みもなされて来ている。そして、こうした傾向は、従前の聖書理解に起因する様々な女性に対する抑圧と差別からの解放だけではなく、現代の社会が陥っている不安と虚無から全ての人間が解放され、この世にある個人が本来あるべき姿を模索しようとする嘗なみでもあるといえよう。

以上の試みがなされるようになった背景には、今日においてなお、様々な混乱と混迷、そして不安が存在する故であるが、キエルケゴールは、既にこうした現代の状況に先だって、当時の社会を「解体の時代」(SV. VIII, 605)と表現し、今日我々が直面する混乱を予告していた。そして、そこからの解放の道を預言者的に啓示し続けたのであるが、とりわけ『不安の概念』<sup>3)</sup>においては、人間が本來的な自己を回復せずに非本來的な自己にとどまる状態を「不安」という概念から解明しようとしたものである。その書において「不安」とは、「無であるところの何かに対する関係」(SV. IV, 347)<sup>4)</sup>と規定されるのであるが、それに先立ち、キエルケゴールの墮罪理解が旧約聖書「創世記」の創造物語、とりわけアダムの存在をめぐって展開されている。

キエルケゴール研究の中心をなす主題として、今までしばしば取り上げられるものは、「罪」をめぐる問題である。それは、特に彼の後期の著作の中で、中心的主題となって表出している。しかしながら、今までその主題が研究の俎上にあげられるとき、人間一般に対して無条件に適用される「罪」として、あるいは、狭義のキリスト教的ドグマを立脚点としているもの等が多く見られた。そこでは、キエ

3) 『不安の概念』は、現在デンマークにおいて刊行中の新版全集 (Søren Kierkegaards Skrifter, udgivet af Søren Kierkegaard Forskningscenteret, København G · E · C Gads Forlag, 1997-) 第4巻に収録されているが、本稿においては、キエルケゴールの著作に関しては、従来の全集第二版を、また、キエルケゴールの『日誌・遺稿集』(第二版)からの引用を使用し、引用箇所を示した。新版全集ならびに、その本文訳注等の検討は、他日に行いたい。

4) 「無」に関する旧約聖書の伝統的な思想「無からの創造 (Creatio ex nihilo)」との関連が想起されるが、そこでは、「混沌 (Chaos)」への秩序付与という理解がある。キエルケゴール自身が目指した、「永遠なるものに正しく関係すること」との関連からすれば、『死に至る病』において言及される、現実の人間の悲惨な状態との関連で「無」は、理解されねばならないであろう。

舟木：S. キエルケゴールの墮罪理解（1）

ルケゴール自身の問題意識を背後から支えていた聖書解釈、ならびに個人的な実存体験が看過されている感が否めないのである。

『不安の概念』の中で言及される墮罪物語において、叙述されるアダムとエバの関係をめぐるキエルケゴールの見解を考察する際にも、キエルケゴール自身の一人の女性を巡る不幸な体験とその苦悩の中から到達し得た彼の聖書理解を勘案することなしには、その解釈に齟齬をきたすおそれがあると言えよう。なぜなら、『反復』および『おそれとおののき』において自らの婚約破棄事件に一つの終止符を打とうとしたキエルケゴールが、後述する如く、後期著作への助走として、『哲学的断片』『不安の概念』を執筆していくこととなったという、当時の執筆事情がそこには存在するからである。それ故、そこでは、哲学的著作として完成度の高い『死に至る病』等、一連の後期作品に至るまでの、いまだ、実存の傷癒えぬキエルケゴール自身の魂の咆哮が行間に見え隠れしているといえよう。そこからキエルケゴールの「罪」理解を考察する際に決して看過すべきでない事柄として、キエルケゴールの女性理解という問題が改めて浮き彫りになって來るのである。

すなわち、キエルケゴールの生涯において特筆すべき女性との関係とは、レギーネ・オルセンとの婚約悲劇に集約されるわけであるが、キエルケゴールをして、そのような行動にいたらせた彼自身の女性理解が、その思想を読み解く上で大きな意義を有すると思われる。

また、『不安の概念』を考察する際、留意すべき点はその著者をめぐる諸事情である。その著者は、仮名著者ビギリウス・ハウフエンシス（ラテン語で港の夜警番の意）となっており、キエルケゴール自身の思想としてではなく仮名著者の立場から本来的には解釈すべきものである。しかし、キエルケゴール自身は、最終稿の段階までその書を本名で出版しようと意図していたことが明らかとなっている<sup>5)</sup>。そこから、『不安の概念』は、他の仮名著作とは異なり、キエルケゴール自身の実存

5) キエルケゴールは、印刷直前の最終稿において『不安の概念』を仮名に書き換えたため、序文を収録する事が不可能となり、『不安の概念』出版後に『序文ばかり』の中に収録して、出版している。また、P. M. メラー教授への献呈の辞は、遺されていところからも、キエルケゴールが本書出版の間際まで本名で出版することとの狭間で呻吟していたことがうかがい得る。

## エクス 言語文化論集 創刊号

経験が色濃く反映している著作とすることが可能であり、キエルケゴールの個人的な女性との関係がそこで展開される女性理解には大きく影響を及ぼしていると考えられる。

女性に関して、キエルケゴールは、その日誌記述の中で、次のような見解を遺している。

「ある意味において、女性は本質的な宗教的奉仕に対して、その本性の故により相応しい存在である。なぜなら、女性の本性は、全体的に自らを与えるということであるからだ。——しかし、一方で彼女は何の説明をもしない——女性的服従に結びついた男性的知性。これこそ、まさに宗教的なものなのである。」<sup>6)</sup>

この記述は、現今のフェミニズムの立場からは多くの批判が出されることと推察されるが、女性の存在意義に対して、特にそれが有する宗教性との関係について多くの示唆を与えるものである。また、「キエルケゴールは自らの著作のうち約3分の1において男性と女性の関係を扱って」いるが、その事の意義について、G. マランチュクは以下のような、指摘をしている。

「キエルケゴールは、最も深遠なる心理学者の一人として、さらに入間と人間関係に関する鋭敏な観察者として、この問題（男性と女性の関係）に関し、一貫して考え方抜かれた見解を有していた。それ故、彼に同意すると否とに関わらず、この主題が論争の俎上に上るときには、耳傾けねばならないものなのである。」<sup>7)</sup> ( ) 内筆者。

本稿においては、キエルケゴールの墮罪理解を考察する上で、前提となる女性理解に焦点を当て、現代のキリスト教における女性理解再考への先駆者とも呼ぶべきキエルケゴールの思想を考察して行くものとする。そして、それはまた同時に、キエ

6) Pap. XI 2A 70番

7) 以下の論文は、G. マランチュクによって 1975 年 11 月 27 日にセーレン・キエルケゴール協会（デンマーク）においてなされた講演が元となっている。保守的な論旨ではあるが、今日のフェミニズムの抱える問題点を先取りする形で、キエルケゴールの男性と女性に関する思想を包括的に考察したものである。  
Malantshuk, Gregor; Kierkegaards Syn paa Mand og Kvinde. Den Kontroversielle Kierkegaard, København; Vinten, 1976, p.30

舟木：S. キエルケゴールの墮罪理解（1）

ルケゴールの罪理解あるいはキエルケゴールが人間の人生に於ける最終段階とした、宗教性への突破に関する考察への準備ともなるであろう。

## II

『不安の概念』に先立つ二部作である『反復』および『おそれとおののき』はレギーネ・オルセンとの婚約破棄事件後の中で執筆された極めて個人的性格の強いものであった。その二書に續いて執筆された『哲学的断片』ならびに『不安の概念』は、その前二書執筆の中で、浮かび上がってきた人間実存が抱える諸問題を、真正面より論じようとしたものであった。従って、副題「原罪という教義学上<sup>8)</sup>の問題に対して、ただ心理学的示唆を与えるのみの一考察」が示すように、文学的性格の希薄な神学的、ならびに哲学的色彩の濃いものとなっている。しかしながら、その根底に流れるものは、前二書と同じく自らの実存体験の中より明らかとなってきた人間の諸問題であることに変わりはない。

それ故に、そこでなされる墮罪物語の解釈も、「無垢」「墮罪」「不安」といった概念を考察する中で、キエルケゴール自身がレギーネとの関係の中から到達した、直接性の中にその根幹を持つ「無垢」という概念と、「無垢」あるいは「直接性」の内に生きることで満足する態度に象徴される人間の「罪」の問題が、キエルケゴール自身の魂の遍歴と相まって読み進められるべきであろう。

キエルケゴールは、レギーネとの関係の中で、女性と男性との間に横たわる差異を徹底して意識することとなった。それは、以下のような事情によって明らかである。

キエルケゴールにとってレギーネとの婚約破棄は彼の生死を賭けたぎりぎりの決

8) 『不安の概念』において「教義学」と言う言葉が用いられるとき、単なる神学用語としての意味を有するだけではない。近世の形而上学に「彼岸的世界に関するキリスト教的理解の抹殺を」予感するキエルケゴールは、「反復」の概念を用いることによって「信仰において反復は始まり、信仰は教義学の問題の機関である」(SV. IV, 322) というように独自の理解を示す。それは、「実存する事が最大の関心」(SV. VII, 302) とする彼にとって、教義学を、観念的なドグマではなく自らがそれを生きることと直接連関しているものとして理解していることに他ならない。

## エクス 言語文化論集 創刊号

断であった。そしてその行動によってもたらされた多くの非難を、彼は、自らを「一人の懲悔者」(Pap. X 1A 267)<sup>9)</sup>と理解することで甘受したのである。しかしながら、その決断も1843年4月16日のフルーエ教会に於ける、レギーネの「うなずき」(Pap. IV A 97)<sup>10)</sup>によって大きく揺らぐこととなる。レギーネの「うなずき」を元の関係への回復可能性と理解したキエルケゴールはこれを機に『反復』の執筆へと促されていく。しかし、その執筆の最中であった同年7月頃、レギーネが別の男性(F. スレーゲル)と婚約したことを見ることとなる。一時は、「私と一緒にになりたいと懇願した」(Pap. IV A 107) 彼女が、時を経ずに別の男性と婚約したことによりキエルケゴールは大きな衝撃を受けるのである。こうした体験によってキエルケゴールは、彼自身が仮名著者、判事ウィルヘルムによって語らしめた次の言葉を自ら体験することになったと言えよう。

「女性は有限なるものを理解し、それを反対の側から理解するのである。それこそが全女性の本質であり、愛らしさの所以であり、それは、男性には決してない、甘美さと愛くるしさの所以でもある。そして、これこそが、女性が幸福である理由であり、男性は決してそうは成り得ず、また、そう成りうる可能性も有していない所以なのである。また、それこそが女性を存在しているものとの調和の中に置く所以であり、男性は決してそうは成り得ず、成るべくもない。このように、女性の人生は、男性より幸福であると言いうる。なぜなら、有限なものによって確かに人間は幸福に成りうるからである。そして、無限なものでは、それ自身を通じて (per se) けつして幸福になることは出来ないからである。女性は、男性より完全である。というのは、何かを説明する者の方が、説明を探し求めている者より確かに完全だからである」<sup>11)</sup>

レギーネとの婚約を破棄した後、その原因を隠すために命を賭して多弁を弄し、まさに説明の限りを尽くしてきたキエルケゴールに対し、レギーネの方は、いとも簡単にその悲劇を乗り越え、自らの目の前にある「有限なもの」の中に飛び込んだのであった。自らを婚約破棄へと決断せしめた「苦しみ」をキエルケゴールは、日付の記されていない日誌の中で、「神が一人の人間を、永遠なる者へと覚醒せしめるの

9) 日付のない、この日誌記述には、キエルケゴールの婚約破棄に到った心情と苦悩、それと共に矜持が短い文章の中に凝縮して記されている。

10) この「うなずき」にキエルケゴールは複雑な意味を読みとろうとする。当時の日誌には、その心情が「Pap. IV A 107」等に葛藤と共に記されてある。

11) SV. II, 279 頁。

舟木：S. キエルケゴールの墮罪理解（1）

は、『苦しみ』を通じてである。」（Pap. X 4A 600）と理解し、さらに、「キリスト教は最後に至るまで苦しみなのである」（*ibid*）というように受け止めている。そこへ至るまでの魂の呻吟は、レギーネに代表される、「直接性」の中に生きる「大衆」と、自らに代表される「単独者」としての意識を持つ者との「異質性」（*ibid*）<sup>12)</sup>に起因するものであったともいえよう。そのことを証明するように、キエルケゴールは同じ日誌記述で、次のように述懐している。

「私は、幼い時より、この世と本来的に異質なために呻吟してきた。一中略— 私にとって、本来的な異質性という痛みが二重に鋭くされた原因は次のようなものである。一人の女性を不幸とした結果、その相手の苦しみを同情して負うようになった時からなのである。」<sup>13)</sup>

このようにキエルケゴールは、「永遠なるもの」、あるいは「無限なるもの」を意識し、それを求める苦しみの中に人生の意味を認めることとは乖離した本性をレギーネとの体験を通じて、女性の中に見出すのである。そしてまた、『不安の概念』第1章において展開されるアダムとエバの物語の中で、キエルケゴールは男女の関係を、次のように表現している。

「彼女（エバ）は、彼（アダム）に対して、可能な限りにおいて内面的な関係に立っていたのではあるが、しかしながら、それはなおも外面的な関係でしかなかったのである。」<sup>14)</sup>（ ）内筆者

さらに続けて、彼は、女性の本質を以下のように叙述する。

「しばしば、語られてきたように、女性がより弱い種であるというのは、如何なる意味においてであるか。さらに、不安は男性より女性にいっそうふさわしいものである 一以下省略—」<sup>15)</sup>

女性との関係だけでは、男性が眞の人生の目的へは到達し得ないこと、あるいは、その原因が、女性の本質に存していることを、創造神話を用いてキエルケゴールは以上のように表現していった。キエルケゴールにとって「人間は心的なもの（Sjal）と身体的なもの（Legeme）との綜合であり」（SV. IV, 348 頁）さらに「無限性と有

12) この「異質性」故の幼き頃からの葛藤と、婚約破棄の関係が、この日誌記述に詳細に綴られる。

13) Pap. X 4A 600 番

14) SV. IV, 317 頁。

15) SV. IV, 318 頁。

## エクス 言語文化論集 創刊号

限性との、時間的なものと永遠なものとの、自由と必然との綜合」(SV. XI, 143)と理解されるが、その質的に異なる両者の緊張関係に女性は耐えることが苦手であるということ<sup>16)</sup>を、自らの体験の中から導き出したと言えよう。

また、さらに同じ、創造神話に関して、以下のような解釈も行い、それを仮名著者である判事ウィルヘルムに語らしめている。

「男性が創造されたとき、彼は、自然の主として、王子として、自然の壮大さとして、そして自然の輝きとして立ったのである。有限なるものの持つあらゆる芳醇さが、ただ彼の首肯のみを待っていた。しかし、彼は全自然と共にありながら、何をなすべきかを理解していなかった。彼は自然を見た。しかし、その凝り固まったまなざしの前では、何一つ見えていないように思われた。全てのものは、彼が動けばただちに一步でそれらを飛び越えてしまうように彼には思えた。こうして彼は、厳めしい姿で、思案にくれて立ちつくした。しかし、それはまた、喜劇的でさえあった。なぜなら、人は、この豊かな男が、その豊かさの使用法を知らなかつたということを見て、笑うに違ひないからである。

しかし、それはまた、悲劇的でもあった。なぜなら、彼にはそれらを用いることが出来なかつたからである。その後、女性が創造された。彼女は、もはや困惑することはなかつた。彼女はすぐさま自らがなすべき事を知り、直ちに、何の躊躇もなく始める用意が整つていたのである。」<sup>17)</sup>

以上の記述によって、女性の「有限なもの」に対する親密さによって、この世的な「審美的段階」の中に安住しうるに足る本質を、女性が有していることが、象徴的に記されている。また、女性が男性に比して「不安」になりやすい<sup>18)</sup>という本性が更に付加されて、それが、加速度的に女性を「有限なるもの」の中での安定へと導いているとキエルケゴールは、理解するのである。

ここまでキエルケゴールの考察を鑑みると、キエルケゴールは女性を精神性的の低い、また、男性に比して、人生の実存段階の低い存在として規定し、そこから全てを理解しているかのように思われる。また、「本来、語り合うのは、神と自分自身でなければならない」(SV. XIII, 634 頁) というキエルケゴールの基本的な立脚点からも、「有限なるもの」に傾き、そこでとどまっている状態は、未だその「精

16) SV. VI, 282 頁、283 頁。Pap. XI 2A 192 番等参照。

17) SV. XII, 278 頁。

18) 「誘惑者の秘密は、彼が女性は不安なのだということを知っていると言うことに尽きる」(Pap. V B53 番) という言葉にも象徴されている。

舟木：S. キエルケゴールの墮罪理解（1）

神」が、「まどろみ」「夢見ている状態」に止まっている（SV. IV, 345 頁以下）にすぎず、真の実存へと向かっていないと見なされるはずである。

しかし、キエルケゴールは、『不安の概念』において、エバを「男性に比べて不完全なものであるということにはならない」（SV. IV, 317 頁）と評価し、ただ、「女性が不安のままで、自己自身の外に抜け出て、ある人間のもとに、男性のもとに、逃れようとする点」（*ibid*）こそが問題であると語るのである。そして、あくまでアダムと同じくエバが「無垢」な存在であることに否定的ではない。そのことを前提として、以下では、キエルケゴールが、女性を如何に把握し、女性のこの世における存在意義を理解しようと努めたかについて、更なる考察を進めていく。

### III

本稿の冒頭において、今日のフェミニズムの立場からキリスト教ならびにキリスト教神学を再検討する動き、すなわち、フェミニズム神学が多くの果実を生み出していることを指摘した。中でも、本稿で言及している旧約聖書における創造神話に対する再解釈は、文法的な釈義に基づいた、再検証が数多くなされている<sup>19)</sup>。しかし、その解釈の前提となっているものは、男性と女性は平等であるという立論である。それに対して、キエルケゴールは、全く異なる立場から女性の本性を論じているところが注目に値する。ここでは、キエルケゴールの立場をより明白なものとする、キエルケゴール自身の言葉を参照しつつキエルケゴールの女性理解へと考察を進める。

キエルケゴール自身は、その当時、デンマークにおいて興った女性解放運動に対して、極めて否定的であり、むしろ、旧態の男女観を固持する保守派と見なされる以下のような表現をその著作の至るところで繰り返している。

「質素で中流階級に属する女性の場合、もしも、彼女が真に家庭的であると呼び得るなら、栄光よ、彼女にあれ！ 私は彼女の前で女王陛下の面前同様の懇懃なお辞儀をするであろう。他方、女王陛下が

19) Trible, Phyllis; God and Rhetoric of Sexuality, Newyork 1978 がその代表の一つである。

## エクス 言語文化論集 創刊号

この質を有していないなら、彼女は単に平凡な女性に過ぎないのである。」<sup>20)</sup>

あるいは、また、キエルケゴール晩年の教会闘争の渦中にあっては、女性ならびに結婚に対しても、更に痛烈な批判を繰り返し「他の性と関わりを持つことは、男性の降格である」(Pap. XI 1A 226 番)とパウロの禁欲主義を全面肯定するような表現すら用いている。この他にも、キエルケゴールは、献身性こそが女性特有の善なる特性である<sup>21)</sup>とか、母性にこそ女性の人生の目的がある<sup>22)</sup>といったことを仮名著者に語らしめている。

これらの言説にのみ注目するなら、キエルケゴールは、旧態のキリスト教、特に、パウロ的禁欲主義、ならびに「現実と観念が逆転した」現状肯定主義<sup>23)</sup>の立場に立っているのだ、という批判は免れないであろう。

しかし、キエルケゴールは、女性の本質の中に人間にとて最も重要なものが存していることをも同時に示している。

「女性は、神は全能であると信じ、男性は、神はある面においては全能であると信じる。女性は、自らの控えめな誓願においてもことさらに熱心になる。男性は、追い出されることのない不動の地点を見出すまで、いや増しに断念するのである。これは、男性の本性に懷疑があり 一 以下省略一」<sup>24)</sup>

「有限なもの」に容易に「逃げ込み」その中で安住する術を心得ているにもかかわらず、女性の本質には、「永遠なる」ものに対して真摯にかつ誠実に向き合うという性質が存在していることをキエルケゴールは是認しているのである。そして、そのことを男性の特質との関係の中では、本稿の冒頭において引用した下記の表現をもって明らかにしていると言えよう。

20) SV. XII, 236 頁。

21) Pap. X 1A 459 番参照。

22) 「花嫁が未婚の女性より美しいように、母としての女性は花嫁より美しく…」(SV. VI, 135 頁参照)

23) パウロ(主義)批判、ないしは、キエルケゴールのパウロ理解に本稿は、言及しない。ただ、パウロ批判に関しては、以下の参考文献を参照した。出版年代は、古いが現在も解決し得ていない、パウロをめぐる問題が明確にされている。特に所収の田川建三著「パウロ批判の課題」には、多くの示唆を受ける。

荒井 献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社 1972 年。

24) SV. II, 283 頁。

舟木：S. キエルケゴールの墮罪理解（1）

「ある意味に於いて、女性は本質的な宗教的奉仕に対して、その本性の故により相応しい。なぜなら、女性の本性は、自らの全てを与えるからである。——しかし、一方で、彼女は、何も説明をしない——女性的服従に結びついた男性的知性。これこそまさに宗教的なものである。」<sup>25)</sup>

ここに至って、キエルケゴールが指し示す人生の最終段階である、宗教性への突破の鍵が象徴的に示されることとなる。「キリスト教界にキリスト教を再び導入する」(Pap. IV A 390番)ことをその著作活動の目的に置くキエルケゴールが、その具体的な現れとして指し示したもの一つが、男性と女性に本来神から付与されてある賜物としての本質的差異を改めて総合する事であったと言うことである。キエルケゴールは、その当時の女性解放運動が目指した、男女の本質的差異をも否定した平等性追求には、徹底して否を突きつけた<sup>26)</sup>。そこには、キエルケゴール自らの実存体験に基づく、独自の女性理解が存していたことを看過してはならない。

さらに、キエルケゴール自身の自己認識である、「例外者」という概念もそこでは同時に留意されねばならない。キエルケゴールは、当時のデンマーク国教会に代表されるキリスト教の現状を、この世的な「安穏と平安」<sup>27)</sup>を喧伝し、本来、人が担いかつ向かうべき方向とはかけ離れた場所へと導くものと理解していた。それは、キエルケゴールが認識しつつそれを生きようとした本来のキリスト教、即ち「キリスト教は最後まで苦しみであり」(Pap. X 4A 600) また、「新約聖書は最後まで苦しみである」(ibid) とは、かけ離れたものであった。「彼岸的世界に関するキリスト教的理解の抹殺を企てる」方向へと進む時代の牽引車へと教会が墮していた状況に対する人々の覚醒をも内に秘めて、当時の女性解放運動に対する批判もなされたのだと言えよう。

### 結び

今日のフェミニズム神学の観点からすれば、多くの批判が浴びせられる可能性を

25) Pap. XI 2A 70番。

26) SV. IX, 133頁以下参照。

27) SV. XII, 111頁以下参照。

## エクス 言語文化論集 創刊号

内包したキエルケゴールの女性理解をここまで考察してきた。現代のフェミニズムが男女平等という前提から聖書の再解釈、キリスト教の再解釈を目指すのに対して、キエルケゴールはあくまで、眞のキリスト教を弁証することを目的に、聖書解釈並びに、女性理解を展開してきたことが看取される。

その立脚点の相違のため、両者の完全な一致は、見ないまでも、本来的な性差を考慮しない平等に対して、性のあり方、換言すれば、一人一人の命のあり方の多様性に重点が置かれてきた今日の様々な解放運動と、キエルケゴールの目指した方向性には、今日でも大きな隔たりはないと思われる。ここで留意すべき点は、キエルケゴールの実存理解の前提となる「本来、語り合うのは、神と自分自身でなければならない」(SV. XIII, 634)との立場である。時代の波や世間の思いとは関係なく、自己の眞の実存に向けての個々が「苦しむこと」こそが、眞の「永遠なるもの」と関係する道であることを、キエルケゴールは、指し示している<sup>28)</sup>。さらに、男性と女性という異質の存在が神によって措定されたことの意義としてその両者の眞の総合によって、より高次の実存段階へと到る可能性がキエルケゴール自身のレギーネとの実存体験を背後に隠蔽しつつ示唆されたものであると言えよう。表面上、保守的、あるいは差別的にも理解しうるキエルケゴールの女性理解であるが、その正当な評価がなされて初めて、真正な「罪」理解とそこからの解放である宗教性への突破を理解する鍵が付与されるのである。ここから導かれるキエルケゴールにおける原罪の理解については、今後の論究に委ねることしたい。

---

28) Pap. X 4A 600 番参照。